

氏名	大野 ロベルト 教授
こんな研究をしています	<p>古典を中心とする文学の研究をとおして、日本の言葉や文化がどのような仕組みを持ち、どのように発展してきたのかを考えています。また、近現代における古典文学の受容や、翻訳による海外への越境などについても研究しています。</p>
こんな成果を挙げています	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『「もののあはれ」の訳し方』文学通信、2025年。</li> <li>・“(En)gendering Literature: Tosa Nikki, or Where Writing Begins,” in <i>Gender Fluidity in Japanese Arts and Culture</i>, McFarland, 2025, pp. 17-31.</li> <li>・“Illness in the Echo Chamber: The Rise of Leprosy Literature in Japan,” in <i>Voiced and Voiceless in Asia</i>, Palacký University Olomouc, 2023, pp. 353-378.</li> <li>・『土佐日記』英訳ことはじめ『日本研究』62集、2021年、69-91頁。</li> <li>・『紀貫之 文学と文化の底流を求めて』東京堂出版、2019年。</li> </ul>
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<p>文学理論を援用してテキストを分析することを続けて来たため、様々な表現や文化の事象を幅広く、理論的に検討することに関心があります。</p> <p>文学に関しては古典だけでなく、明治期から昭和期までの近代文学はもちろん、フランス文学やドイツ文学にも親しんで来ましたので、世界における日本文学の位置というものにも関心があります。</p> <p>また、文学と権力(例えばハンセン病文学など)、言葉と身体(例えば能や舞踏など)といったテーマについても興味を持ち、研究しています。</p>
こんな授業を行なっています	<p>「多言語相関論 IIA・B」</p> <p>パロディという汎用性の高い概念を介して日本文化の特徴を抽出したうえで、それを異なる時代や文化の場合と比較検討するというプロセスをとおして、論理的に思考する技術を身につけます。</p> <p>パロディは言うまでもなく笑いと結びついており、研究という堅いものとは対照的なイメージがありますが、おそらく笑いは人間にゆるされた最も高度な行為の一つです。笑いについて考えることは、人間について考えることなのです。</p>
学会や社会でこんな活動をしています	<p>求めに応じて、市民講座の講師を務めたり、展示や番組づくりに協力したりしています。紀貫之をとりあげたNHK「知恵泉」では、講師役として出演もしました。</p> <p>また、文学研究の実践として、大野露井という筆名で創作や海外の文芸作品の翻訳を行っています。小説に『塔のない街』(河出書房新社、2024)、翻訳にコルヴォー男爵『教皇ハドリアヌス七世』(国書刊行会、2023)などがあります。</p>
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	<p>専門の観点からも、ぜひ紀貫之を挙げたいと思います。大陸の文学である漢詩を消化しながら、日本独自の表現の地平を切り拓いた貫之のような歌人たちの活躍がなければ、現代の私たちの言葉や世界観はまるで違うものになっていたはずです。結局のところ、文化を守り育てることができるのは、異文化に心を開くことのできる人々なのではないでしょうか。</p>